

【熊野】 ゆや

「どれもこれも桜・桜・桜では盛りだくさんにすぎて感興を削減されるばかりである。(中略)できれば焦点を桜一つに絞って、何かアットいわせる?ほどの名器を使ってみたいものである。」
佐々木三味『お茶事』より

桜の季節の茶会ほど難しい道具組はないかもしけません。

桜の意匠の道具が多種あるなか、執拗に並べ立ててはくどく、興醒めしてしまいます。

そもそも心情においても、世間が静ころなく花に誘われて浮かれている最中、静寂な茶の心を保つのは容易ではありません。

しからばこの時季の道具は思い切って無季に徹するのも一興でしょうし、花の気を取り込むのであれば厳しく節度を守るバランス感覚が必要ではないでしょうか。

それは、暖色を基調とした絵画を描くのに、暖色だけでキャンパスを埋め尽くしては色に酔い、確かな形が描けないのに似ています。寒色あってこそ暖色は生きるのです。

- ・うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば
- ・春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも 『万葉集』 大伴家持

暖かく陽気な春の中にいて何となく悲しいという家持のアンニュイな心境です。

春という暖色の絵の具の上に心の奥底を広げてみると、幽かな悲しみという寒色が浮かび上がるというのです。

家持の歌に限らず、謡曲『桜川』も生き別れた親子の憂が景物の桜と見事に響きあっています。
(『折々の銘』 桜川 参照)

謡曲『熊野』も同様に、春の陽と心の陰とが美しく響きあった傑作です。

遠江国池田の長者の娘熊野[ゆや]は平宗盛の寵愛を受けていました。熊野は病の母を見舞うため暇を請うのですが宗盛は許してはくれません。それどころか宗盛は熊野を伴って花見に行こうと牛車を支度させるのです。

そこへ国元から母の危篤を伝えに使いがやってきます。

熊野は母の手紙を宗盛に見せ再度暇を請いますが聞き入れてくれません。しかたなく熊野は宗盛に従い清水寺まで花見に行きます。酒宴の中で熊野は重い心のまま所望により舞を舞います。

そのとき突然、雨が降り花を散らしてしまいます。熊野は「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」と詠み短冊にしたため宗盛に渡します。

宗盛はようやく熊野に暇を与え、熊野は清水の観音様のご利生と感謝し、急ぎ国元へ旅立つのでした。

この曲も熊野の陰鬱な心と華やかに広がる桜景色との対比が見られます。

桜の陽の気を静寂なまでに洗練させた美がここに 있습니다。

「熊野 松風に米の飯」という言葉があるそうです。何度聞いても飽きない、噛めば噛むほど味が出る名曲だという意味だそうです。

故事や古典文芸などから茶会の趣向を取材する手法は私も頻繁に、特に薄茶の席に用います。その際、私は趣向に近い道具を並べすぎないように注意をしているつもりです。くどくどとした道具組は趣向の表現を離れ、物語の説明に陥ってしまうからです。表現するということと説明するということは全く別のことではないでしょうか。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~